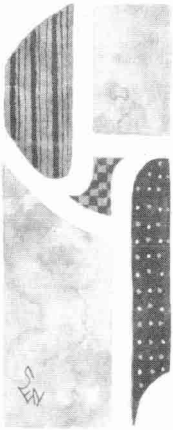
長谷川伸全集

第十三巻

夜もすがら検校　異人屋の女
討たせてやらぬ敵討　ほか



朝日新聞社

長谷川伸全集　第十三巻
短篇I　夜もすがら検校　ほか
全十六巻・第八回配本
一二〇〇円

昭和四十六年十月十五日発行
著者　長谷川伸
発行者　朝日新聞社　角田秀雄
印刷所　凸版印刷
発行所　朝日新聞社
東京　大阪　北九州　名古屋

装幀　原弘
帯挿画　岩田専太郎

©SHINYOKAI 1971

0393-240113-0042

長谷川伸全集　第十三巻

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

目　次

夜もすがら検校　九
天正殺人鬼　二〇
がてん藤九郎　二六
作手伝五左衛門　三三
解手の話　四三
異人屋の女　五五
どろんの道　六七
田舎小僧新助　七五
入墨者の死　八四
敵討冗の三年　九〇

討たせてやらぬ敵討　一〇三
廻りぞ逢わん物語　二一四
淀百人斬　一四九
敵討たれに　一五七
悪には過ぎる　一七七
敵打邯鄲枕　一八六
稲荷町中蔵　二〇五
親分病　二一三
落首問答　二二五
勝つが負　二三五
誓の貼札　二四五
母を打つ敵討　二五七

関東綱五郎　二六八
仇討の後　二九七
二本松心中　三〇四
戦国行状　三一二
三梃駕籠　三二〇
生きている鬼　三三三
不入斗の仇討　三五五
笹喜三郎主従　三六一
混血児兵隊　三七五
首切れ弥次郎　三九四
金子市之丞　四一三
胴を惜む物語　四二七

濡れ闇の男　四五五
高まち小屋　四七四
幽霊妻　四八三
飛驒の了戒　四九五
解説　村上元三　五一一

短篇Ⅰ　夜もすがら検校　ほか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

夜もすがら検校

一

音もなく降りつづく雪の中に旅姿の盲人がただ一人、両手をあげて狂気のように叫んでいる。

街道とはいえ里はずれ、人家は遙かに遠く盲人は、むざんな雪の苛責にとじこめられて泣き叫ぶ声すらが冷たい雪に籠められて遙かな人里に届こうはずはなかった。

「りよ子、りよ子、友六、友六やい」

雪の路を驚地にはしる盲人は、忽ち足を辷らせ体を雪に埋めて倒れた。

「りよ子、りよ子、友六」

盲人はむっくと起った。よろめく足許あぶなく、答えるもののない夕暮に、叫び声を振り絞っている。

「人は居らぬのか、路行く人はないか、人家はないか、あっても皆笑っていなさるのか、盲じゃと思うて侮ってござるのか」

やみくもに雪を蹴って狂乱の態、杖をとり落した悲しさは、鷺足になって行くうちに松の根方に足をすくわれ、撞と雪の中へ打ちのめされの形に倒れた。その上へ雪もつ枝が寒風にゆられて氷地獄の逆落し、頭の上から吹きのめした。盲人は暫く身を起す力もなく雪に涙の顔を圧しつけて泣いた。

盲人は夜もすがら検校といわれた平家琵琶の名手であった。江戸の高家の仲介で大名衆の招ぎをうけて京をたったのは、彼には見えぬが東山が緑にもえる今年の春であった。友六という伴当を召しつれ、江戸へ遙々下りついて四絃、四柱の生む二十音、平家一部十二巻、百九十四句の妙を大名衆の耳にいれて「無双」といわれ名誉を博した。

江戸滞在は春から夏へ追々と日が永かった。検校はまだ四十に手のとどかぬ眼こそ不自由なれ、体は健やかに血気にみちていた。さすが東の旅寝の淋しさを、冷たい枕にかこつ夜のつれづれを、友六は永年の召しつかわれ人だけに、見てとって、夜伽のものを抱えてはとすすめた。一応はしりぞけたものの、検校は、短か夜の寝ぐるしさに、本音をつつんで友六のすすめをしりぞけたことを悔いた。朝の風、夕凪、日のちかい軒端に油蟬のうるさい時にも、秩父から襲ってくる神立の時にも男手ばかりの世帯、女といっては飯焚の髪に油の香もないのでは、なんとやらもの足

らぬ心地がして、言葉のやさしい女の住む京が恋しくなった。四条に残してきた妻のこと、寝物語の口説というほどでもないが思い出を、今となっては思い返されること幾度かであった。

友六は主人の意を汲んでか、更まっての断わりもなく、中年増の女を一人つれ込んだ。名はりよという、年は二十四とか、まず江戸弁の快い音声が検校の耳を喜ばした。

日がたつにつれて家の中は、なごやかな風にみちた気がした。検校は京も妻も鴨川の水の音も恋しいとは思わなくなった。検校は見えぬ眼をしばたたいて、感をまとめてりよの顔立も姿も心に描いた。快いりよの江戸弁を聞きながら、女の俤、容を心底に描いてその日その日の楽しみを深く味わった。

垣根にからんだ朝貌の輪が、唐辛子ほどに衰えて、朝に夕に秋が風にのって訪れてきた。検校は帰洛の日の迫ったのを残念に思った。東へ下る時のように、今度も友六をつれて上りの旅路に、草鞋の紐を結ばねばならぬ日が、いよいよさし迫ってからも検校の心は江戸を離れたくなかった。心残りはりよにあった。身の廻りの世話は勿論、なにかにつけての気の廻り、京訛りをとくに覚え、検校の言葉癖をそのまま口に移している憎くない女、どう考えてもりよを残して去る気にはなれなかった。りよも又検校をたよりにぴったりと凭れていた。もう日限の知れた枕の数に涙声さえまじってかき口説く、検校はそれをもっともとも嬉しいとも聞いた。

友六の心はと訊けば、城方のながれを汲む大山派から出て誉れの琵琶法師、昔々の生仏如一、さては明石検校にも劣らぬお方故、女一人ぐらい京へ召しつれたとて、世上の沙汰もこれあるまい、よしや人の口にたてられぬ戸があれば、友六承わって開けても閉じもいたしましょうと主思いの一言を、検校は肉の鳴るほど嬉しく聞き、吉日を卜して故郷へ飾る花のみやげは人に頼み、三人づれの旅姿、江戸を発足したのは雁の空をわたる頃であった。

信仰の信濃に善光寺如来を拝み、木曾谷の秋をさぐり、それから京へと旅の予定は、江戸を出る前方、検校、りよ、友六の三つ鼎できめたのであった。検校にとっては木曾谷の秋の色がどのように美しかろうとも寝ざめの床、桟橋も手に触れねば、心に描けぬ盲目には無用のことであった。その旅路を予定のとおりに、木曾谷福島のはたご屋に草鞋の紐をといた。

木曾川の水の音を窓の下に聞いて検校は、中ゆり、さし声、むねの声、ひろい、口説と節々を興にまかせて微吟した。木曾谷の秋には少し遅れたが、すてがたい景勝の見えるでもない検校は、好ましい女をつれての旅が、楽しくて楽しくてならなかったのである。

りよは友六と二人、売りにきた花漬の箱をひらいて、眼もあやな美しさに興がって、子供のように喜んでいた。

その翌日からりよは病気というて床についた。ところの

医師の手当を乞い、一日二日とたったが病はおもるばかり、検校の眉根に拭うてとれぬ憂いの色がういた。三日、四日もそれが濃く深くなるのみだった。

十日あまりしてりよの病が治った頃には、木曾の朝晩は寒さがめっきり強くなっていた。山の雪が次第にさがって人里につもる日も近いと人はいった。諏訪から来た人は雪におうたともいった。

三日、四日は又むなしくたった。

美濃坂本を過ぎれば寒さも薄い、ここは峡とて寒さも厳しい、西へ行く旅なれば雪にあうこともありませぬと、何事も心得たらしく友六はいうた。りよもその尾について、わたし故に旅寝の宿にむだな日をかさねた、鴨川とやらの景色も早く見たし、清水さまへも参詣が早くしたしと、帯をねだるときのように、体を検校にすりつけていうた。

そうだ、冬はどこにいてもくる。木曾谷の冬ごもりも住み慣れて懐かしい京の冬がよいと、検校も出立の気になった。草鞋に霜柱をざくっと踏んで三人が出た日も寒かった。

中津川を出で岐阜へ行くのだと友六はいった。検校は旅なれぬ身の、信ずる伴当のきりもりに随い、山駕籠に足の冷を気にして揺られていた。りよが跟いていると思うと寒さは小腹にシクシクと当るほどに強かったが、心は安らかだった。

検校は手にふるる雪を覚って、雪だ、友六、はたご屋は近くにないかというた。友六の答うるありませぬという声を、つれないと聞いたのを検校ははじめ、自分のひがみと思った。

雪は次第に降りまさってきたが、友六は泊りのことを気にする様子もなかった。検校は又暫くしてから友六にすこしも早くはたごにつきたいといった。友六は黙っていた。幾度となく友六に言葉をかけはじめた。その都度に友六の声は検校よりよほど前にあった。りよを呼べばその声も検校からは距れて友六と並んで歩いているかと思った。

検校は今までも邪推をしないのではなかった。盲目の力の届かぬところで、友六とりよとが何かしているのではないか、そう疑ったのは長野への旅へ出てからではなかった。江戸の借宅で涼風に裾を吹かれてうたた寝の昼、ふと睡りからさめた時に疑いが起った。何気なしに触れた手にりよの衣紋の乱れを知ったこともある。それらを明らかに尋ねるのは盲目のひがみを曝露して、りよに疎まれる因になりそうな気がしたのでじっと辛抱した。不具者のもち前のねじけて考える心の歪みを、我ながら恥じて抑えつけ、心を心に叱らせて、さあらぬ態に努めてしていた。

雪のつもったのは駕籠昇の跫音でも知れた。寒さは肌を刺した。たまらなくなって、友六を叱りもした。荒々しい声が常になく口をついて出たのは、盲目をすてて勝手に先立って歩く腹立よりも、友六がりよと同じ途を歩くのが気にさわったのだ、嫉妬のほむらが燃えていると、検校自身

も心づいたが抑え切れなくなっていた。友六の声らしくフフンといったのを聞きつけて検校は、赫となって口汚なくガミガミと罵った、もうひがみは露骨になった。

罵りつづけている検校の頬に、雪がちらちらとあたった。駕籠は俄かにおろされて、引出されるように検校は雪の路に立たせられた。駕籠昇は口も碌にききもせず、雪を踏んで去って行く跫音が検校をギョッとさせた。

検校はすくんだ。

恐ろしいと思った検校の見えぬ眼がみはられたとき、友六の腕は検校のふところへ捻じ込まれた。抵抗いもしたが力はとても及ばなかった。雪の中に圧し倒されて、胴にまいた金子は包みごと奪われた。検校は雪にのたうって怨み泣きをした。その声の上から叩きつけたのは雪の塊りであった。友六が投げたか、りよが投げたか三つ四つ、検校は悲憤に雪の中を転げ廻って泣いた。

音もなく降りつづく雪の中、両手をあげて狂気のように検校が叫んでいたのは、そのときからすこしたってからである。路も知らず、方角もわからず、問うべき人もなく、雪地獄の苛責に身をもがいて、検校はつれなく吹きおろす枝の雪に、幾度かうちのめされた。

日は暮れても雪あかりに空が見える。いつかやんだ雪は夜に近くなって荒涼さを四辺に加えた。しかし、検校はそれを知らなかった。

「路行く人はないか、人家はないか、盲の難渋を見殺しになさるのか、殺生じゃ、情けというものを知らぬのか、人はないか、人家はないのか」

憎い友六もりよも忘れたのではない、寒さに血が凍りそうな今、雪からのがれたい一心が先になった。雪からのがれたい、暖かくなりたい、ただそればかりが一図だ。

覚えを失った手で雪を支え、疲れた体を起した検校は歩めなかった。足に覚えがもうなくなったのであった。――気がつけば呼吸の加減で雪に顔が埋もれたのを知った。

「わしは死ぬるのじゃな」

死ぬるのだ、それに違いなかった。

「夜もすがらの検校ともあろうものが、たとえ人知らぬ道傍に死ぬるとて、最期の心がけがなくては恥かしい」

うつらうつらと睡魔に襲われる気がした。検校は必死に努めた、なんとはなしにただ努めた。

「去るほどに」

これだった、検校の最期をかざるものは、日頃愛誦の「女院往生」微かながら口からもれてきた。

「寂光院の鐘の声、今日もくれぬと打ち知られ、夕陽西に傾けば、還御ならせ給ひけり、女院はいつしか昔や思しめされ給ひけむ、忍びあへぬ御涙に、袖のしがらみ塞きあへさせ給はず、御後を遙かに」

いつか声に力がみちてきた。雪も寒さもいつか忘れて、耳へ通う我が声に、検校は、名残りの曲を楽しくうとうた。

二

「盲殿、もう気分はよいかな」
検校は命をとりとめた。見えぬ目にも焚火の焔が感ぜられた。濡れた着物はいつかかわいている。手を出して掻きさがせば、そこには雪も寒さもなく、釜敷の破れたのが触れた。
「わしはよう死ななんだな」
「そうじゃのう、この先の三叉路で、雪の中から何やらいうているものがある、それを俺がみつけたのじゃ、引起して連れてきた、それが盲殿お前じゃ、命があってよかったなあ、先刻まではあの隅に転がしておいたのじゃ、そして焚火をそろそろとして家の中を暖めた、一概に盲殿を火で暖めたら皮肉がくずれるわい、したがもう大丈夫じゃ、腹の中まで暖まるがよい」
ああ救われた、検校は再生の恩を合掌して懇ろに繰り返していうた。
「礼はいいなさるな面倒じゃ、盲殿はどこへ行かれるのじゃな」
「わしは京に住むものじゃ、のう、わしを京へやってくだされまいか」
「雪はやんだ、星が出ている、明日は請合うて天気じゃ、足許はわるいが暖かい日が照るわ、出立するがよいわい」
「わしは無一文じゃ、供のものに金を盗まれ、雪の中へすてられたのじゃ、ここは何というところか判らぬが、京まで帰るわしには、路用の金が一文もないのじゃ」
見えぬ眼から、ほろりと涙が流れた。
「路用の金がない、それは気の毒な、じゃが、俺とても盲殿と同じく無一文の貧乏人じゃ、盲殿は盗まれる金があるだけまだよい分じゃ、俺などは盗まれるものさえない、見なさい、というても盲殿では見えもすまいが、ここの家は無住も同じ荒れかたじゃ、俺も盲殿の命を助けたのじゃもの、京へ楽々と送ってやりたいが、恐ろしい事には貧乏人、先立つ金がない、心ばかり役にもたたぬ、せめては今つくったかゆが暖かい、これなと啜ってくだされ、夜が明けたら又どうにぞなるかも知れぬわい」
「有難うござる、かゆとは忝けない——のうこなた様も貧しいのか」
「おお貧乏人じゃ、乞食にも劣るわ、なれども、心だけは劣らぬつもりじゃ、ま、それだけが取柄よ、ははははは」
淋しい笑い声を聞きながら、検校は、かゆを啜りはじめた。
「寝道具もない、雪の中に寝るよりはましと思うて今夜はすごすがよい、客人の盲殿ばかりではない、俺も寝道具がないのじゃ、怨みっこなしで結句よいわ、ははははは」
「ああうまい、五臓がほっと暖かくなった、忝けない、この恩は忘れませぬぞ」
「恩、それほどでもないわい、俺もどうせ旅の空へ出る人

間じゃ、どこで倒れて他人の世話になろうも知れぬ、盲殿にする世話も、いつかは俺が他人からしてもらうことじゃ、はははは」

又しても、悲しげな笑い声だ。

「のう、ここにあるのは何でござる」

「それか、盲殿を暖める焚火の種じゃ」

「割木でなし、柴でなし」

「仏壇じゃ」

「おお、何で仏壇をこなた様は焚きなさる」

「他に焚くものがないからじゃ、ここの家は人に明日はとられるのじゃ、俺はそれまで待っていない。今夜の中に逃げるつもりでいたのじゃ、一旦はここの家に名残りを惜み、涙をおとして外へ出たのじゃが、途中でそれ盲殿をみつけ、又戻ってきたのじゃ、明日は他人手にわたる家、板一枚引き剝がして焚いても心がすまぬ、さればとて焚くものはない、こればかりはと思うて売りもせず、夜逃げするにも背に負うて出た仏壇じゃが、困っている人のためにならら仏罰もあたりもすまい。焚いて盲殿のたそくになれば、俺も重いものを背負うて夜逃げせずともよい、それでの、壊して先刻から焚いているのじゃ、お位牌だけは何処の果へ行っても肌近く置くつもり、こればかりは手放さぬ、その他に香華をたむける器もない、とくの昔に売ってしもうたわい」

「言葉ではつくし切れぬ恩じゃ、有難い」

「拝むのはよしてくれ、ただ喜んでくれるだけでもう結構じゃ、それはそうと盲殿、その襟のところに何やら光るものがあるぞ」

「え、ここにかな」

「いや、その下のところ、おおそれじゃ」

「おお、これは」

「金じゃ、久しゅう見ぬが一分ではないか」

「それでは友六の奴めが、財布を盗むを、盗ませまいと争うた時、不思議に落ちて残ったのじゃ」

「やれやれよかったのう盲殿、一分あれば安心するがよい、明日は俺と二人で出立しょう、途中で京へ帰りの馬曳を見つけて雇ってやる、ともかくも明日は朝早く出立しょう、盲殿が馬の背にのるまでは俺が一緒についていて進ぜるわ」

「とてものことにわしとともに京へござれ、どうでござる、四条のわしが家は狭うもない、いろいろと礼もいいたし」

「いや、俺は俺で考えがあるのじゃ、いつかはここへ戻って田畑を買いもどし、家の跡式たてねばならぬ」

「再生の恩人殿への報恩にわしが、金子は都合しましょう、多分ではなくとも必ず進ぜる、是非ともに京へござれ、そうなされ」

「まあ断わりましょうわい、俺は俺の腕一本で金を叩き出してみとうござるわい、ははははは、ああ盲殿、その仏壇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook